慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史の裏面
Sub Title	
Author	久米, 邦武
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.6 (1910. 6) ,p.705(77)- 715(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19100615-0077
Abstract	
Notes	講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100615-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以上、列擧せしが如き嚴重なる規定を設けしに不拘、資本的大企業家は之れが爲めに毫も痛棒を感ずることなかりき、何となれば彼等が巨萬の富を有すると、獨逸に於ける都市が政治上極めて重要なる地位にあると、中央政府の不振なると、官權と是等商人との間は極めて親密なる關係の存せしことは、遂に以上の如き規定をして何等の價値なき死文と化せしめ、資本主義の火の手は益々熾んなるに至れり。

（明治四十三年六月一、二、三日稿）

講演

歴史の裏面

久米邦武

今日は「歴史の裏面」といふ題を掲げ置きましたが、私は歴史は裏面より見るといふ注文を出さなくてはならぬ、諸君歴史にお志があるならば、隨分種々の方面から歴史をお讀みにならなくてはならぬが、裏面といふことも餘程必要と思ふ、それで裏面より見たる日本歴史に付ては、歴史の表面は男で、裏面は女といふことになつて居るが、裏面は女と一口に言ふ譯にいかぬ、詰る所女でありますが、人類社會總ての有樣は、男が外に出て働いて居る、其の背後には女が家庭に居つてそれを働かせて居る、さう言へば、男は女から働かされて居る譯だが、事に依つたらば、其の事實を突留めたらば、或はさうかも知れぬ、だが歴史といふものは詰る所外に現はれるものでありますから、之を西洋では、ヒストリーといふ、ヒステリーでは無い、ヒストリーといふ、どういふ意味か、其義は分らぬが、日本では之をフヒトといふ、フヒトといふのは、文の人、文の上に現はれた人の行跡が卽ち歴史である、斯うフヒトといふ意味を解する、それで此の人類社會の古い事を研究する學問は色々あるが、考古學、或は人類學抔といふのは、是は皆古い遺物に依て調べて、さうして其研究に付て、文書に出て居るものを參考し、口碑抔を參考し、確な物を捕へて研究するが主眼である、古い時代よりの文書記錄に書き現はした行跡を調べる、それに付て過去の事蹟を考へて、將來の考に資するといふ爲に、先づ學ぶ筋であります、それが史學の根本であります、根本の據り所が書き物でありますが、此の書き物の種類普通世間では、歴史といふものは多く物語類で成立つて居る、是が餘程面白いものであります、物語類を

崩して言へば、講釋師の講釋を聞く樣なもので中には隨分興味のあるのがある、けれども興味がある丈け過去の本當の眞相を書いたものかと云と大きな疑がある先づ過半嘘なことが多い、そんなものは眞の史學にはならない、それで文書記錄の確な物に依て事實を研究して行くといふとに近來はなつて居る、それでは其の文書記錄といふもので、眞に昔の人の爲した行跡の眞相が本當に知れるか、それは餘程薄弱なものといふ說があつて、史學といふものは成立ぬものである、矢張り演劇を見、講釋を聞く樣なものだといふ、惡口があるが、さうはいくまいと思ふ、けれども文書記錄といふものは、隨分不自由なもので、社會の眞相を書き現はすことは先づ出來ないと言つても宜い、文書のみならず、總て言葉の上にても人の事蹟といふものは、十分に眞相を言出すことは、先づ不可能の事と思ふ、近い所の證據は、私の書いた讀賣新聞の裏面より見たる日本歷史は、アレで通過したけれども、アレをモウ少し委しく書いたならば、或は風俗壞亂とか、安寧秩序を妨害するとか何とかいふことで、發行禁止を食うたかも知れない、それでは政府が人の自由を奪うとか、何とか其時には膨らせて怒つた、自由を與へる本當の良い政府で、立憲政治の本當の政治で無くてはいかぬと言つて宜いが、政治でなくも、社會の制裁といふものがあつて人の行跡を言現はす言葉に於て、差控えなければならぬことが隨分多い、殊に書き物には餘程差控えることが多いのが、是が人間社會の總ての傾きあるに依て、文書記錄にも確な事實を書いても、裏が必ず殘つて居るといふとは是は免れないことで、それで歷史には、どうしても裏面を見なくては、歷史は見えぬといふことを私は確に確信するのであります、其事を近く申せば、新聞の雜報でありますず、雜報といふものが、社會の今日の出來事を其儘書くことは出來ない、色々用捨斟酌がある、決して正面から書くことは出來ぬ、其上に雜報記者といふ者が、事實を少し面白く、書き直す筆癖がある、又それで無くては

月給が取れない、それで雜報を見るに必ず其裏がある、又之に付て、是は斯うだらうと讀者が段々其人の觀察次第に其裏を考へて見ると、書き過でしが多くある、雜報といふものは、事實には餘程違つたことがある、中には普通にそんことは無い筈だと思ふと多く中る、史學の上手下手は、此處に現はれるものを見るに、歷史の通則を知つて居ると能く分る。

それで總て歷史の裏面といふものは、何で見るかと言へば、社會の通則を先づ茲に自分で考へなくてはならぬ、人類社會が、總ての人の行動をするのに、誰でも不正なことがある筈、そこを一つ先づ根本を押へなくてはならぬが、それを押へるには先づ之を生物の普通の機能から話さなくてはならぬ、總て草木より動物迄、我々も動物だが、是が何の軌道の中に生育して居るかと言へば、雌と雄、男女交合してさうして自分の種類が繁殖して居るのが生物である、（笑）諸君が笑うけれども、午蒡でも大根でも雌雄交合して種が出來るのである、犬猫等の動物は、四季折々に、それを路傍の巡査の前でも何でも構はず、風俗壞亂なことをする、人類社會は、其處が萬物の靈であらうか、之を隱す機能があるに依て、それきりでは無い、それに類似のこと迄、隱す、耻るといふことがあるに依て、歷史面に現はれたものは、社會の眞相を悉く書くことは出來ない、出來ないに依てそれで此通則を推して行く、總ての人に掛る所の通則から推測ることがある、自分が書かない所を讀まなければならぬ、是が卽ち歷史の裏面であるそれで人間といふものは、何事をして行動をして居るふ、種々の事をして居るが、一般の人が漏なく行動する所の通則を立てなければならぬ、それを究むれば、人には慾と情といふ者がある、此の慾と情の刺激に依て、それから使はれて動いて居る、其慾といふことに刺激されて何事に現はれるかと言へば、諸君が皆誰でも知つて居ることで、先づ廣く言へば衣食住といふものが肉體を養ふに必要なもので、是が無くては自分の肉體を養ふて

とが出來ぬ、それで外の動物が巡査の前で風俗壞亂を許されることになると、是が缺乏して居るが、人は萬物の靈で恥を知つて居る者は、衣食住といふものが無くてはならぬが、其中に衣服と、居住といふものは、日々の行動に自然に含むけれども、是は先づそれ程毎日の事では無い、それで或る歌に、「ひもじさと寒さと戀と比ぶれば、恥かし乍らひもじさまさる」といふ歌がある、それで一番人の日々極肝要なことは、朝夕三度づゝ食べることである、諸君は毎日其の食ふ爲に動いて居る、一食でも食はないと、直ぐにひもじさが出てくるから、食は必要である、食つて人間は何を爲して居るかと言へば、食うて眠る、此二つである、それにモウ一つある、是が又言ふことが出來ない、それは何かといふと、ひるといふことで、人といふ者はお互に食事をしてさうして能く眠つてさうしてひらなくてはならぬ、此三つが揃はないのを病氣と言ふ、それで自分に衛生といふことに本當に注意して自分の身體が貴重にあるならば、食事が快く食ふことが出來るならばそれは結構であるが、食事が進まない時は病氣である、又餘り進んで食ひ度くて食ひ度くて堪らぬ時は、病氣の作用であるから、其時は注意しなければ、必ず病氣を發して居る、それから熟睡をする、熟睡をして居る間は健康體だが、不眠症を起すと、病氣である、神經衰弱である、又眠たくて堪らぬ、居眠りをする樣になつたのも病氣だ、是は諸君、自分でも皆知つて居るだらう、食うと眠るといふことは誰でも大概知つて居るが、第三のひるといふことになつては、注意が薄いが、是は今の食と眠るよりも又肝要である、秘結するそれを浮かりとして居る內に、ひよつと腦溢血で死ぬ、是が卽ち慾といふもの、刺激よりして行動する人は、大抵食ふ事と思つて居れば宜い、諸君の樣な學問した人は別だが、學問せぬ者は皆さうである、事に依ると食ふ爲でなくても、金を蓄める人は、是は蜜蜂の樣なもので、多少蓄めると、遂に他から取られて仕舞ふ、普通の者ならば、慾情に刺激されて食ふ、モウ一ッ無くてならぬのは情感である、是も一ッの健康に伴つたので、是が又一寸三ッある、一ッは家庭、家族或は朋友抔が小家庭で、互に話をする、物を食べる、相互に打解けて話す間に精神が融和する、モウ一ッは景物の樂みで、前に現はれた草木に花が咲く、鳥が啼く、花鳥風月、其他總ての景色を見て、それに付て歌を讀むとか種々の事があつて性情を慰めて、趣味といふものがそれから生ずる、文學的の技藝抔も是から生じて慰みが是から出來て居る、之を以て精神を慰める、それからモウ一ッある、必ず裏面にどうしても殘る是が一ッ文書記錄のみならず、口に言ふのも憚るが、モウ一ッは男女交合、それ丈けで餘り先に話を進めずに置くが、それが前のひるといふのと同じ位なもので、是が無くては情の刺激が出來ぬ、謠曲に、戀は曲者といふ歌がある、餘り猥褻に涉らぬ所で、是で話を切りますが、それで慾と情との望を滿ずに付て、其中に名譽心といふものが出てくる、それで一人で素晴らしい者だ、エラい者だと言はれ度いといふ望がある、其望があるに依て、諸君の勉强するのもそれが爲である、それは宜いが、女は少し違ふ、裝飾して虛榮といふものに走る是は女に限つて居るが、それで總ての慾が成立つて、男女社會が成立つて居るのでありますが、之を名づけて名利名聞といふ、名利名聞の爲に人類社會は働いて居る、諸君がさうでやないと言つて自ら之を否認しやうと思つても能く考へて御覽なさい、矢張り名利名聞の外無い、其の名利名聞で働いて居る所の其の事業とかいふものは、恰も草木の芽を吹き花が開くと同じ樣に、百科の學問を起して行く是が人間の働く現象である、花といふものは美しいものとなつて居るが、美しくないものがある、其裏面を見て何の爲に斯ういふ花が咲いたかと言へば、いつの間にか交合して種を生み附けて、實を結んで居る、花の裏面には、必ず子を生む機能がちやんと働いて居つて、さうして後に種になる、それが卽ち人類並に總て生物の行動である、それからして社會の歷史

上の通則が出てくるが、先づ總ての物が子を生む、子といふものは、物に依ると、澤山生むもので、鯡抔は、數の子といつて中々多い、其外動物に子を持つのが多いものがある、植物も澤山持つ、あれが皆あの通りに生活するならば、世の中は鯡や鯛で埋める筈だが、動物に制裁があつて、所謂弱の肉は強の食といふことがある、澤山生むけれども他の奴が皆食つて仕舞ふから、後に大きくなる奴は僅かしかない、さういふ仕掛である、總て動物が其通りで、諸君も其の一類で、力から言つたら牛よりは弱いが、弱の肉は強の食で、其肉を食つて甘いと言つて居る、弱の肉は強の食で、世の中は相制して、動物はマ少し位はあつて呉れたいと思ふけれども、注文よりは減つて仕舞ふ、人間に至つては食ふことが出來ない、外に食ひ手が無い、けれども此の人間社會の中には、弱肉強食といふ筋に當る行動があつて、歴史上に所謂合戰といふことが起つて、人を潰す、此間日露戰爭の時に十萬近くの人を潰して仕舞つた、アレ抔も

歴史上から大觀して見れば、弱の肉を強が食つたといふより仕方が無い、其他色々な事があつて、人の數が幾らか制限されて居るが、詰る所外の樣に、他から食ふ奴がないから人類繁殖といふことが非常に多い、是が一番歴史上の原則で、是からして國の治亂興廢が起る、其本を詰めると、人類繁殖といふことで、之を一方から言へば、人が夫婦で子を生む、其子に自分の名譽の位地を殘す、土地を讓り家の株を讓つて、さうして先づ慾を慰め、繁昌させやうといふことを一般の者が希望して居る、其内にも弱い者より強い者、馬鹿な者よりも利口な奴が上に立つて、それを我が子孫に傳へ樣といふことを思ふ、是が人類社會の總ての行動に現はれてくる、詰り其の子孫の繁榮を圖つて自分の家を何處迄も大きくなさうといふ此の競爭の上より世の中が亂れて來る、變化をして來るのである、故に歴史の裏面には必ず男女といふ者が後ろに潜まつて居る、人類の繁殖といふものは、鯛だの鯡だのと極端に違ふけれども、之を假

に積つて見れば、夫婦といふ者が出て此の夫婦が自分一倍の子を持つとすれば、二が四となり四が八になる、是から積つて行けば九代目には五百幾人かになる、夫婦で四人といふ平均が餘り多過ぎ樣といふお考があるか知らぬが、昔の人は、富貴の人といふ者は、妾といふ者を持つたから、子孫は此の數よりは多くなる、夫婦が家を起した其家の家族が、九代目には千人以上になると平均して宜い、二人が千人になれば、萬石の土地を持つた者は、一家族に十石しか割當ることが出來ぬ、十萬石地所を持つた者が、百石づゝ割當るといふことになるから、一方には家族が繁殖してくるから、一方には土地を取らなければならぬ、それが爲に今でも離散稼いで家を大きくなさう、子孫を大きくしやうと言つて競爭して居る、實はパン問題である、慾と情との二ッの爲に驅られたかと言へば必ず裏面には之を持て居る、それで家族の繁殖するのを、昔より三族、五族、九族と言つて、人の家族の圖がある、圖に書いてある、それはどういふことかと言へば、三ッの族といふのは、夫婦で子を持つ所よりして、自分の身體と自分の父があつて子がある、是が三族、それから横の傍に兄弟姉妹といふ者が出來て、父子兄弟姉妹が是が三族、是で三代籠つて居る、之に祖父が上にあつて、祖父と父と自分と子と孫、之を五族といふ、横に伯父と甥と從兄弟が出來てくる、是丈けが親族といふ、親族といふ者は、何が一番親しいかと言へば、三族が一番親しい、モウ一ッ延びれば五族になる、之にモウ一ッ自分の祖父に祖父を加へたのが高祖父、曾祖父、祖父、父、己、と五代になる、下には孫、曾孫、玄孫、といふ者を加へて、仕舞には名も分らぬ樣な者があつて九族といふ、九代といふと九族になる、九代を經ると、頭からくゝると親族といふものが、此處等で盡きる、昔の天子のお定めには、親王さんも五世にして親盡きるといふことになつて居つて、高祖、曾祖、祖父、父、己と五代迄は姓を賜はつて臣下に列するといふことになつたが、それ以下は五代にして親盡き

る、それから先は家族同士になつてくる、斯ういふ譯で、相互の情も薄くなつてくる、九代の內に、ウツカリ情慾を恣にすると、千人以上の子孫が出來るといふことになつてくるから、歷史は必ず九代十代の間に社會は一變するに凡そ極つたものである、何せかといふと、社會の機能は、夫婦交合して子を持つ、子孫繁昌をお互に望む、それが爲に齷齪働いて居つて、段々家族が次第に繁昌してくるが、九代になると、夫婦が子を持つてそれが千人以上になつて、食はせることに困るといふことになつてくる、必らず其時分には種々の競爭が起つて社會が一變する、支那では孔子が春秋を書いて、十二公二百四十年間の事を書いて、二百四十年の間で、治亂興亡の理は是で盡きると言つて、春秋では言うて居る、十二公二百四十年で盡きて居るが、九代が都合に依ると、二百七十年で盡きる、德川十五代で二百七十年、モウ是で亡びる數は來て居る、德川氏は竟におヂヤンになつた、人類社會の表に見た所の大局面といふものは、必ず之に付て變化を生じてくるものである、それから推せば、神武天皇より今の天皇陛下迄百二十代、北朝を入れると百二十四代を通過して居るが、此中には系圖が種々になつて居るが、親子の系統からすると六十八代が、今の　天皇陛下になつて居る、其の六十八世を、九世で推すと、七ツ九世が來て居る、神武天皇から九代、開化天皇迄は、何とも書いて無いが、神武天皇のお子が、今の例を以て推すと、千人以上になつたと思はれる、そこで變化を生じて、崇神帝の時に改革の事が書いてある、ハツクニシラス、あれで時代が一變した、崇峻帝から九代を經ると、雄略天皇の時代には、天子を初め貴族が段々繁昌する、其中には相競爭して所謂弱の肉は强の食とやつたこともあるそこで全國に手を配つて、垂仁天皇になつてから熊襲の征伐、蝦夷征伐をやつて、さうして全國に七十何人の王子を分けて封ぜられたとある、それに引續いて段々手を附けて、應神帝の時は、種々の事よりして朝鮮の南半島に迄、日本の勢力

を及ぼしてそれに貴族豪族を横附けられた、さうしなければ、家族が繁殖して國を保つことが、出來ぬからである、それから齊明天皇九代目は、桓武天皇で平安朝の初である、桓武天皇は九世一變で、其間何事をしたかと言へば喧嘩が起つた、或は謀叛罪に依て自殺させる、そんなことで雄略天皇の後も、一時皇統が絕えて、繼體帝の時に王子を越前から迎えて立つた、が其後稱德帝の時に皇統が絕えて又、天智天皇の系統に戻つて、それから桓武天皇になつた、此間何事があつたかと言へば、其間皇族が繁昌をして互に喧嘩をして、相殺すといふ有樣になつて居る、それから平城天皇、嵯峨天皇以後が、讀賣新聞に、私が裏面觀を書いた、藤原氏が同じ貴族の中で、一番繁昌して外の者は段々家が減つて來た、全國の領地を取つて藤原氏の有になつたが、それが又變化をして武家政治になり、南北朝時代があつて、德川時代になつて、段々變化をして來たのである、それは何の爲かと言へば、人類が繁殖して家族が出來た、其家族に悉く名譽の位地を與へてさうして代々盛んの家になさうといふ慾念に驅られて爭が起る、斯ういふ時になると天子の方が負ける、之を西洋人はシミッたれなことを言うて之を生存競爭と言つて居るが、生存競爭はパン問題で食へないから起るのである、日本の方は生きて居ることは譯は無い、生きて居つて情慾を十分遂げてさうして其結果、持つた種や實をば、此中に立て又も善くしやうといふ慾情から、銘々の智慧と力を絞つて、弱の肉は强の食となつて、其結果遂に德川の封建になつて仕舞つた、それから推してくると、九世が七度掛つて享保迄で盡きて、享保以後櫻町天皇より今上天皇迄五代、まだ半分程しか來て居らぬ、それで歷史の跡から見ると、享保迄は、貴族も士族も下の總ての者が階級の中に据えられて、應分の祿を取つて保つて居たが餘程詰つて生存競爭と言はなくちやならぬ樣な部分に陷つて、家を廣めることが出來ぬから、それで享保以後といふものは、日本全國で一軒の總領があれば、次男は養子

に行く、養子に行くことの出來ぬ者は平民になつて、素町人とか百姓とかにならなければならぬ、士として土百姓にならなければならぬから、次男三男は婚姻が出來なかつた、婚姻した所が家が立つことが出來ぬ、十石とか何十石とか、それが無くて食ふことが出來ぬ、さうして此の明治以前迄保つて來た、所が總領は、餘り活潑な利口な者が無い次男三男は利口な者だ、其次男三男は、人類繁殖機能の普通の人間になることが出來ずに歴史の裏面といふ外に出されて、表面許りで生活をされて居るから、こんなことで行けるものかと言つて皆奮發した、それが尊王攘夷といふものになつた、言ひ立て樣は幾らもあるが、種々の事があつて、殺された者があるが遂に、舊幕政府を叩き潰して仕舞つた、次男三男が良い月給を取て愉快を初めて來た、高い所に書生から飛上つた、其一時の愉快といふものは怖しいもので、大名が一箇月に八百兩、月給八百兩其次が六百兩、書生が月々六百兩取る、此割から割出すと、旅費を取るのに京都から大阪迄往來すると、一日に百兩、兩といふと今の金に比較すると十圓になる、八百兩は八千圓、六百兩は六千圓になるから仕方が無い、亂暴使ひに使つてさうして一時は愉快であつたが、固より詰つて居る會計がさう長くは續かぬ、それで元の享保以後の詰りに詰つて、次男三男は結婚も出來ぬといふ時代と同じになつた、其時代に日本全國の人民は、二千五六百萬もあつた、それが無制限に人口繁殖をやらかしたから凡そ數が一倍になつた、當今では或は增俸論に減租論といふ反對現象を議院で爭はなくちやならぬが、增俸した所が中々昔六百兩といふ樣な時代に回復することは出來ぬ、一方の租稅は減じても外のものに稅は幾らも掛つてくる、さういふ樣に詰つたのは、畢竟何の爲に詰つたかと言へば、人民の繁殖機能が速進した爲に斯うなつた、併し日本全國五千萬が食ふには差支ない、普通にして、食慾情慾を贅澤をせずに居ればいけるが、それを贅澤をしやうといふならば、幸に滿洲だの朝鮮だの支那だのにも

空地があるから、あすこへ行つて働くと、又うまい飯が食へるといふ希望で行く人がある、さうすれば五千萬人の内三分の一、一千五百萬人働いた者が行つて仕舞つて、こつちに殘る者が、是から働いて食はなければならぬ、是からの人は男女共稼ぎで、さうして外に出ても内に居つても共稼ぎで、さうして繁殖機能をやらなければならぬ時世になつて居る、是は諸君も餘程考へなくてはならぬが、其時代に進み込んで、西洋より餘程贅澤を敎へられて、電燈電車抔は便利だから用ひても宜いが、夏も襟卷をする樣な贅澤をやり居ると、事に依ると一方の慾を遂ぐると、情を遂ぐることは出來ぬといふ形になつて、歴史の表面から裏面を貫徹して行くことが出來ない機になりはせぬかといふ氣使ひがあるから、それで歴史の裏面といふことを演題に出して、諸君に是丈けの事を御注意申して置くから、餘り名譽心といふものに驅られて、無用の事に馳せずに、餘程謹慎して夫婦共稼ぎで、此處等の開けぬ所に、神武天皇はどうかなれども、千年許り前の大きな大豪族を起すといふ希望を起すならば宜いだらうが、是はお勸め申すといふ譯で無いが、先づ歴史の裏面のお話すれば、今日の所はどうしても餘り愉快な時世でない餘程骨を折らなくてはならぬ時世であります、

（二月五日史學會に於て）